

## 配分原理と生命再生産の理論

おおくまのぶゆき  
大熊信行

大熊信行（一八九三—一九七七）は一八九三年（明治二六）山形県米沢市に生まれ、米沢中学から東京高等商業学校に進学、同校本科を一九一六年（大正五）に卒業後いったん民間企業勤務するが、改めて母校の専攻部経済科に入学、福田徳三に師事する。

一九二七年（昭和二）に高岡高等商業学校教授となつて二年後、大熊は彼の研究生涯を貫く自説となつた配分原理を、「経済理論的思惟に先立つもの」（後に「生活の時間過程と時間配分」と改題）、「配分学説史考」そして「マルクスのロビンソン物語—価値法則の背後にあるもの」等の論文を通じ世に問う。これらを含めた戦前期の主要な論文は、後に『経済本質論』（一九三七年から五五年まで六回の修正があ

る）および『資源配分理論』（一九六七年刊。所収論文は前著と多く重複している）に収められる。

大熊は「理論経済学の伝統のない国に生まれた」（一九四〇年）自らのあり方を「欧米諸学派の理論を、この国の生活直観の地盤のうえに強力に総合」（同）することに見いだした。その学風は、欧米大家の祖述に終始する「書物主義」を嫌い、自らの観察を通じて人間生活の主体性と総合性・統一性に着眼し、欧米諸理論を読み込み、それらを批判的に再構築した内容をもつて果敢に文筆を振るうという論客ぶりであった。なかでも彼はマルクスの熟読・解釈に力を入れた。戦前期には『資本論』第一部第一章第四節に登場するロビンソン・クルソーの孤立経済から配分原理を抽出し、戦後は『経済学批判序説』で展開された「生産と消費の同一性」の解釈を通じ生命再生産理論構築を試みた。いずれもマルクスが理論的輪郭を明示したのではなく、マルクスの所論にいわば埋め込まれた理論を、大熊が表面に引き出す

という独自の試みであった。またその試みが、労働価値学説と限界効用理論の統一という大胆なねらいをもっていたことも、大熊がユニークな経済学者とみなされるゆえんである。大熊は、総生活時間視点の欠落という彼がみたマルクスの限界を、配分原理を媒介にゴッセンの第二法則を原型とする「固体均衡の配分原理」という「武器」を引き出すことにより超えられると考えた。

大熊は配分原理と配分法則を区別している。ロビンソンの孤立経済で「必要そのものがかれを強制して、かれの時間をかれの異なる諸機能の間に正確に配分せしめる」(マルクス)ことにおいて把握された大熊の配分法則は、人間の肉体的・生理的性質に必然的に根ざす「必要」に基礎づけられた一つの自然法則とされる。孤立経済のなかにも発見されるこの「総労働の配分の法則」は、あらゆる歴史的生産形態に内在し、その経済全体に「安定的平均性および全体性」を付与するものであり、これを排除して

は「経済学の脊柱」を他に求め得ない合目的性をもった普遍的平均法則である。これに対して配分原理は「意識され、計画され、そして実行さるべき一つの規範」として、あるべき社会主義的な分業形態を律する総労働配分の原理である。それは「経済主体によって経済行為の法則が自覚され、それが規範的な形式原理として再把握されたもの」(「経済における正気思想」一九六五年)なのである。初めて一九三七年(昭和一二)に刊行されてから三改訂目で『経済本質論』の副題が「計画経済学の基礎」に落着いているのは、大熊による経済本質把握の中核をなす配分原理が、いかに社会主義的経済理論構築の展望に満ちているかをよく示すものである。

「経済主体は経営主体である…：経済行為もまた経営行為として、つねに全体性において統一的に捉へられなければならない」(「カントにおける選択理論」一九四〇年)とする大熊は、「経営学」を「企業経営学」と「生活経営学」に区分したうえで、とくに後

者を「生の営みの構造を分析するもの」としてこの領域の独自の理論的開拓を試み、生命再生産の理論の提起に至る。そして生命再生産の場として「家族」に着目するが、その思想の萌芽は『経済本質論』第二版（一九三八年）の序「日本の家について」にあった。当時の大熊において家族論は国家論の文脈にあったが、後年、国家と家族を「人間の実践的な価値の両極」と考えるようになったのは『国家悪』（一九五七年）を上梓したあとのことと大熊自身が記している。戦時下、彼は配分原理を国家総力の理論や国家科学論へと展開し、占領下には公職追放令を受ける。その苦渋の体験は自ら語るところ（『定稿告白』一九八〇年）だが、戦後、核時代の国家に死の象徴をとらえる一方で、その対極に生命再生産機能をもった家族を置いた。またここにはすでに大熊が再三主張する生産概念の二重性論が組み込まれている。すなわち「生産」は物財（物的生産）のみでなく人間の生命そのもの（人的生産）にも適応でき、翻っ

て後者の考え方はマルクスに至る経済学の思想的伝統に属することが強調される。また生命の再生産は同時に物財の消費であるという「生産と消費の同一性」視点から人間の消費過程の生産的性格を論じ、「家族」を「消費者」に一面化した近代経済学を批判する。

近代の思想は経済というものを「他の生活からもぎはなしすぎた」が、しかし経済を超えて、生活活動の全領域を支配する原理がある。それが配分原理であり、これは「むしろ生活原理と呼ぶべき」とも大熊は述べている。彼には「経済理論的思惟に先立つもの」を見つめる一貫した眼があった。またそれゆえに彼の論題は教育論、国家論、家庭論、生活科学論などジャーナリスティックな舞台を含め広範囲に及んだ。そして今日、配分原理と生命再生産の理論を大熊理論として統一的にとらえようとする場合にも、経済学領域を超えたパースペクティブが要求されるであろう。大熊研究の現状では、まだまだま

った成果があがる段階にはないが、近年注目されている経済学における生活視点が、より一層の理論的成果を生み出すためにも大熊研究が数少ない貢献となるはずである。彼は七〇歳を過ぎ家政学界にもたびたび現われた。一九七七年（昭和五二）八四歳で没するまで終始、大熊は自らの学的真意を世人に熱く語ってやまぬ論壇の経済学者であり続けた。戦後の所論を集めた『生命再生産の理論―人間中心の思想―』（一九七五年）からは、大熊の経済学者に収まりきれない闊達な現代思想家の一面が十分に現れている。

（福田）

【参考文献】

杉原四郎「大熊信行」〔日本のエコノミスト〕日本評論社、一九八四年所収）